

# 女給研究序説

小関 孝子

## Introduction to the Study of Jyo-Kyu (Waitress)

Takako OZEKI

要旨： カフェ黎明期においては、カフェという最先端の店で働く女性たちを新しい職業として見るむきもあった。彼女たちは経済的な困難を抱えた女性たちであったが、客たちが彼女らに向けるまなざしは、境遇への同情はあるものの蔑みを帯びてはいなかった。ところが、客と恋愛関係になる女性給仕が増えてくると、世間の女性給仕に対する評価が変化した。もともとカフェの客とそこで働く女性たちの間には、社会階層という点で大きな開きがあったため、客と彼女たちの恋愛は対等な関係ではなかった。妾になるものや悲恋に泣く女性たちの噂がささやかれるようになっていった。カフェという業態が広く一般にも認知されるようになると、カフェの女性給仕という職業が認知されるようになっていった。しかしその立場は、素人と玄人の中間という存在であった。カフェという近代味を帯びた新しい飲食業であっても、酒を提供する飲食空間で給仕をする女性たちへのまなざしは、料理屋の女中たちや酌婦へのまなざしが絡み合っていた。

キーワード： 女給、給仕、ウェイトレス、カフェ、銀座、

## 1. 「女給」を研究するための留意点

### (1) 同時代史料の執筆者の偏りと時代的な偏り

1911（明治44）年、店名に「カフェ」という言葉を用いた飲食店が銀座に立て続けに開業された。カフェ・プランタン、カフェ・ライオン、カフェ・パウリスタの3店舗である<sup>(1)</sup>。カフェはいわゆる当時の新興ビジネスであり、そこで働く女性給仕という職業もカフェとともに登場した新しい職業であった。新聞記事やエッセーなどには、カフェ・プランタンやカフェ・ライオンの女性たちに関する記述が散見されるようになっていった。

注意しなければならないことは、カフェで働く女性たちに関する記述が、ほぼ全て男性によるものであるという点である。銀座に誕生したカフェの主な客層は、新聞社や雑誌社に出入りする機会が多い知識階級の男性たちであった。カフェ黎明期に関する同時代史料は、当時の男性文筆家たちによるエッセーや新聞雑誌記事が中心となる。明治後期には執筆活動を行う女性たちも現れはじめていたが、彼女たちは知識階級に属する女性たちであった。知識階級の女性たちは夜に外食をするという習慣が無かったことから、カフェは女性文筆家たちとは縁のない場所であった。したがって、入手可能な当時の史料（新聞雑誌記事、手記、小説など）のほとんどが客側である男性の立場から、しかも執筆業に携わるインテリ層の立場から書かれている。性別の点からも、社会階層の点からも、当時の女給とはかけ離れた立場からの女給論が蓄積されているのである。

「女給」を研究する際には、史料の量が時代によって偏っているという点にも注意が必要である。女給やカフェに関する同時代史料は昭和初期に急増する。「エロ」という言葉が氾濫する昭和初期には女給やカフェに関する読み物やエッセーが豊富に出版されるが、これら史料は玉石混交だと考えるべきだろう。客側の手記だけで当時の女給を説明することは、当時と同じまなざしを女給に投げることになってしまう。史料が豊富な昭和初期の言説をもって全体を論じることがないよう注意が必要である。

## (2) カフェーの給仕係という意味での「女給」という言葉の定着は関東大震災以降

関東大震災前まではカフェーで働く女性給仕人は「女給仕」「女ボーイ」「ウェイトレス」「カフェーの女」という言葉で表現されていた。1919 (大正 8) 年に刊行された『訂正増補 新らしい言葉の字引』(実業之日本社)では、「女給」という言葉は、「女給仕の略称。活動写真館の女手引。切符賣。<sup>(2)</sup>」と説明されている。1919 (大正 8) 年時点では、「女給」という言葉はカフェーの女性給仕という意味よりも、活動写真や劇場で働く案内係という意味で使用されることが一般的であったことがわかる<sup>(3)</sup>。震災前の「女給」という言葉の意味は、会社の受付兼お茶くみ係のことも指していた。

ところが、同辞典が1925 (大正 14) 年に改訂されると、「女給」という言葉の説明が変化し、「女給仕の略称。多くカフェーの女。また、活動写真館の女案内人及び切符賣。<sup>(4)</sup>」と記された。1925 (大正 14) になると「女給」という言葉がカフェーの女性給仕を指す言葉として定着していたことがわかるが、この時点ではまだ他の職業の意味も含んでいた。

1925 (大正 14) 年2月に発行された東京市社会局編纂『婦人自由の道』では、「女給」という職業についても言及されている。注目したいのは「女給」という言葉が二カ所で使用されていることである(東京市社会局 1925: 10-11)。飲食店での給仕係を示す場合には、「女給」という言葉に補足説明はない。いっぽう、活動写真や劇場の案内係を示す場合には、「女給 (演技場案内人、出札係)」と補足説明がある。これらの史料から、関東大震災を境にして「女給=カフェーの女性給仕人」という意味がしだいに一般化されていったことがわかる。

## 2. 関東大震災前にカフェーで働く女性給仕にむけられた複数のまなざし

カフェー常連客からみた女性給仕と、カフェーとは縁遠い人からみた女性給仕の評価は異なっていた。また、カフェーの女性給仕に対するまなざしは、銀座にカフェーが登場した直後と、カフェーが認知されるようになった1920年頃では異なっていた。カフェー誕生からの約10年間は、女性給仕に対する評価が定まっていない時期なのである。女性給仕に対する評価が、発言者の立場によってあるいは時期によって異なっていることを明らかにするために、ここでは複数の立場からカフェーの女性給仕に対する評価を確認する。

### (1) カフェー誕生直後の女性給仕に対する評価：近代的な新しい職業として好意的な言説が散見される

はじめに、カフェー誕生直後に女性給仕たちの仕事がどのように評価されていたのかを確認してきたい。

女性給仕に対する評価が新聞雑誌などで頻繁に取り上げられるようになるのは、カフェー業態が認知されはじめた大正中期以降である。その頃の議論と比較するために、まずはカフェーが登場して間もない頃の証言として1913 (大正 2) 年11月30日の『讀賣新聞』に掲載された「エプロンの誇 市内カフェーの花 女給仕の實生活」という記事に着目したい。「エプロンの誇」という言葉からもわかるとおり、この記事ではカフェーの給仕という職業が好意的に書かれている。記事の最後を締めくくる文章は、「先づ女の<sup>ジョブ</sup>職業としては良い部類とでも申すべきか<sup>(5)</sup>」である。女性給仕のいるカフェーとして「カフェー・プランタン」「カフェー・ライオン」を含む銀座のカフェー4店が挙げられているが、まだカフェーそのものが珍しい時期である。職種の名義としては、「女給仕人」「給仕女」「ウエーターレス」という言葉が用いられている。ひとつの記事の中に複数の表現が用いられていることから、新しい職業であることがわかる。

同記事によると、彼女たちのなかには高等女学校を卒業したものもあるが、多くは小学校卒業程度の学歴で、生活に余裕のある者はなく、給料は固定給とチップであった。彼女たちの行動については店の責任者が厳しく管理していたので「比較的困難的が少ない」とある。勤務形態には住み込みと通いの2つの形態があった。通いの場合の勤務時間は朝9時から終電までが一般的だったようである。彼女たちの求人方法は新聞広告と紹介によるものであった。記者は木挽町や尾張町の「口入屋」取材し、カフェーの給仕の世話をしたことは無いという回答を得ている。決して裕福な家庭で育った女性の仕事ではないけれど、比較的待遇も良く、悪い仕事ではないというのが記者の評価である。

1913（大正2）年11月に掲載された知久泰盛による潜入記事「カフェーライオンの給仕となる記<sup>ホーイ</sup><sup>(6)</sup>」でも、給仕たちが若くて美しいという指摘があるものの、蔑むような言葉は使われていなかった。

## (2) 婦人雑誌の扱いにみる、中産階級の女性たちのまなざし：「職業婦人」の枠外にある飲食店での接客業

大正期は、中産階級の増大とともに「職業婦人」という言葉が注目され始めた時期でもあった。大正期の婦人雑誌では職業婦人に関する特集がたびたび組まれている。婦人雑誌は、職業婦人に関する議論を牽引する立場にあった。当時の婦人雑誌ではカフェーの給仕という仕事をどのように扱っていたのだろうか。

『婦人之友』1913（大正2）年11月号の記事「新しく出来た婦人の職業」でとりあげられている職業は、タイピスト、婦人速記者、婦人歯科医、女子薬剤師、女子事務員及び簿記係、電話交換手、女子電信係、為替預金局の判任官、小学校教員及び音楽教師、女医である。『婦人之友』という雑誌は、中産階級の中でも知識階級の妻を主な読者層としていた。そのため、紹介されている職業は一定の教育水準以上の女性たちが就く職業ばかりである。1913（大正2）年当時では、まだカフェーの給仕が認知されていなかったことも考えられるが、直接客に対応する職業はひとつも取り上げられていないことから、知識階級向けの雑誌では接客業そのものが紹介する対象から外れていたと考えられる。

比較的大衆向けの婦人雑誌『主婦之友』では、1918（大正7）年3月号で「婦人職業案内」という記事が掲載されている。この記事で取り上げられている職業は、「女医、歯科医、産婆、薬剤師、通信局通信員、鉄道院の事務員、通信事務員、電話交換手、タイピスト、婦人記者、速記者、女髪結、女料理人、銀行会社事務員、女店員、仕立屋、画家、看護婦、中等教員、小学教員、幼稚園保育母、自動車運転手、モデル、製糸教婦、印刷局女工、専売局女工、砲兵工廠女工」である。接客業としては「女店員」、飲食業の仕事としては「女料理人」、学歴がなくても就ける職業としては「女工」が取り上げられているにもかかわらず、カフェーの給仕に該当する仕事は紹介されていない。

大正中期は職業紹介という点からみてもカフェーの給仕という仕事は扱われていない。1919（大正8）年の東京市職業紹介所の女性への紹介実績は、紹介者数163件のうち女中が126件で全体の約77%を占めており、次いで職工18件、事務員4件、子守4件となっている（町田2016：252）。カフェーの給仕の紹介は公的な施設では行われていなかったことがわかる。ところが実際の数字をみると、警視庁の統計では1920（大正9）年末の東京市部の飲食店数は8,467店存在し、そこで働いている女性の総数は20,770人と記録されている（権田1923：55）。実際には飲食店が多く女性の雇用の受け皿となっていたのである。

これらのことから、大正中期においては、カフェーの給仕以前の問題として、飲食店における給仕の仕事が「職業婦人」という範疇で扱われていなかったことがわかる。

## (3) カフェーの常連客、松崎天民のまなざし

銀座のカフェーの常連は、カフェー誕生とともに女性給仕たちを身近に見ていた証言者である。ここではカフェー黎明期からのカフェー常連客である松崎天民の論考のなかから、カフェーの給仕に対する評価が記されている1915（大正4）年のエッセーと1920（大正9）年のエッセーをとりあげ、5年間でカフェーの女性給仕に対する評価が微妙に変化していることを確認したい。

### 1) カフェー誕生直後の好意的な評価：1915（大正4）年刊行『恋と名と金と』より

はじめに、カフェーが登場して間もない頃の評価として、松崎が1915（大正4）年に刊行した『恋と名と金と』（弘学館）での発言を確認していきたい。同書のなかで松崎は、カフェーでの給仕を女性の新しい仕事であるとして、「『カフェーの女』は、新東京に無くてはならぬ景物の一つであると共に、婦人問題の一つに加ふべき新階級である。（松崎1915：174）」と述べている。また、客と恋愛関係になるものがあることについても理解をしめし、「若い美しい女だもの、戀物語の一節や二節は、その過ぎ来し方のページにあらう。カフェーの女にならない前からも、エプロンを胸に當るやうになつてからも、若い女は、若い男の仲間の問題になつたであらう（松崎1915：175）」と述べている。松崎は、若い女性であればカフェーで働いているか否かに拘らず、恋愛問題はついてまわるものだと考えていた。

また、松崎は、彼女たちの接客態度については、真面目で道徳的であると見ていたようである。松崎は同書のなかで彼女たちのことを「貞操を賣物にすることを、表看板にして居る様な女は、未だ一人も見えない（松崎1915：

176)」と述べており、男性に不慣れであるとして、「握手されるさへ、罪深いことの様に思つて、顔紅らめる（松崎 1915：177）」とも述べている。カフェ黎明期においては、女性給仕たちの仕事は、決して蔑みの対象ではなかったことが、松崎の発言からもわかる。

## 2) 大正中期の同情的な評価：1920（大正9）年刊行『女人崇拜』より

つづいて、5年後の松崎の評価を確認する。松崎は、1920（大正9）年刊行の『女人崇拜』（精禾堂）のなかで、女性の職業全般について考察している。松崎は、女性の職業には結婚後も働き続ける職業と若い娘時代だけの一時的な職業の二種類があると考えていた。結婚後も働き続ける職業として挙げているのは、医者、産婆、看護婦、女髪結、遊芸師匠、女優である。いっぽう、若い娘時代だけの一時的な職業として挙げているのは、電話交換手、貯金局員、鉄道事務員、商店や会社の事務員、給仕、カフェの女、女中、芸妓、娼妓である。階級による区分ではなく女優、娼妓も挙げたうえで、結婚後も続けられるかどうかで分けている点が松崎独自の視点である。ちなみに、松崎はこの時点でもまだ「女給」という言葉を用いていない。「給仕」という言葉と「カフェの女」という言葉を分けて使用している点に着目すると、1920（大正9）年時点ではまだ「カフェの女」イコール「女給」ではなかったことが同書からも確認できる。松崎が「給仕」と表現している職業は、企業での応接係を指している。カフェでの接客係はそれとは区別されていたことがわかる。

松崎は「カフェの女」という職業について、「今日では、カフェからカフェを流れ歩くような女もあるが、その多くは「カフェの女」を一時の方便として、娘時代の或る一時期に、生活を託するというだけの事である。そのわずかな短い時間だけでも、「カフェの女」にならねばならぬ女のうえに、私は「生活の不如意」という、痛ましい月日の流れを見た。（松崎 1920：243）」と述べている。松崎がカフェの女性たちに対して「痛ましい」という言葉を用いるようになったことに注目したい。松崎は、5年前には彼女たちの恋愛にも理解を示していたが、その後の人生に苦しんだ事例をいくつも目の当たりにして、カフェで働くことへの評価が変化し始めている。

また、松崎はカフェで働いていた女性たちを回想しながら、次のように述べている。

日本最初のカフェ女と云つても宜いプランタンのお柳さんは、多病の身を色好みする男の前に委ねて、浮名を唄はれたのも東の間の夢と死んだ。喫茶店に居たお鈴さんは、方々流れ歩いた末に、後また喫茶店に舞戻つて、女給の監督をして笑つて居た。ライオンに居た女の上にも、法學夫人となつたり、新聞記者の妻となつたり、某伯爵嗣子の妾となつたり、若い役者と浮名を誦はれた女が、數へ切れぬほど澤山ある。カフェの女から、眞面目な人妻に——私はこれを明るい結末として喜ぶと共に、カフェの女からお妾へ、私娼へ、女將へ——、私はこれを暗い結末として、悲しみ痛む者である。（松崎 1920：248）

松崎は過去を振り返り、幸せに暮らしている女性たちもいれば、悲運に泣いた女性たちもいるということのを思い返している。だがこの心境は、松崎本人も1920年時点でなければわからなかった。松崎によるカフェ開業当初の新聞記事には、カフェの女性たちは愛嬌をふりまくこともなく淡々と業務にあたっていたと記されている<sup>(7)</sup>。松崎が彼女たちに女性としての興味を抱いていた様子も感じられない。それでも、彼女たちのなかには、予期せぬ人生をたどることになるものが珍しくなかったのである。

また松崎は、カフェが流行っている原因についても、そこで働く女性たちの魅力が客を引きつけるからであると述べて、次のように述べている。なお引用文中の傍線は筆者による。

今のカフェが、こんなに栄えている当面の原因と理由とは、若い美しい女性が給仕するからである。在来の料理屋の女給よりも、近代味の勝った表情なり服装なりをしているうえに、中には女学校を出た者もあれば、相当の話術を心得ている女もある。特に若くて美しく、どことなく囁殻町、浜町、鶴巻町あたりにいた売春婦と、共通したエキスプレッションがある点に、多くの若い男達は、疑似性欲的の実感をそそられて、カフェへカフェへと、今や一代の風を醸しているのである。（松崎 1920：245）

女性給仕たちが媚びた接客をしているという指摘はないものの、彼女たちが放つ「近代性」と「女性性」が若い男性客を引きつけているという指摘である。当時の日本の飲食店をとりまく性差の構造、つまり客が男性で給仕が女性という構図が持ち込まれながら、カフェーが広がっていったことが背景にある。大正中期の時点では、恋愛沙汰も少なからず起きていたが、接客方法そのものは、「性」を売り物にして媚びていたのではなかった。それにもかかわらず、客たちがカフェーの女性たちを「性の対象」と見ていたという点が重要なのである。

ここまで松崎の発言を確認してきたが、松崎は自分がカフェーの常連であるため、女性給仕たちを擁護する側になりがちである。そこで比較のために浅草を研究フィールドとしていた権田保之助の発言を確認してみたい。

#### (4) 浅草を研究のフィールドにしていた権田保之助のまなざし：接客業への蔑視

浅草をフィールドにして下層階級の人々の調査をしていた権田保之助は、研究対象として接客業の女性たちに関心を寄せた先駆者といえるだろう。権田は1923（大正12）年2月に『社会研究 娯楽業者の群』（実業之日本社）を刊行し、同書のなかで「カフェーのウェトレス」に言及している。当時は社会風俗を研究の対象にすること自体が珍しかったため、権田の同書は貴重な史料である。ただし浅草と銀座は全く性質の異なる街であった。権田の分析は浅草をフィールドにしている研究者の言説であること意識しながら読む必要があるだろう。だが、これらの背景を念頭においたとしても、権田の接客業の女性たちに対するまなざしは厳しいものであった。

権田は同書の最初の章を「水商賣・客商賣の女」とし、その項目として「藝者」「娼妓」「私娼」「料理店の女中」「待合の女中」「カフェーのウェトレス／蕎麦屋汁粉屋の女中」「宿屋と下宿屋の女中」の7つに分けている。権田はこの章の冒頭部分で、「ゲイシャを思い起こせば、直ちに娼妓を聯想し、私娼を思ひ浮ばせられる。扱ては大所の料理屋の姐さんから、カフェー・バーのウェトレスを経て、蕎麦屋、汁粉屋、天麩羅屋、鮎屋の女中さんまでが同一のシステムの中に浮び出して来る。待合の女中、宿屋下宿屋の女中衆までも同じ世界の住人である。（権田1923：2）」と述べている。権田が、接客業に従事する女性たちをひとくくりにして「同じ世界の住人」と考えていたことがわかる。

ここで改めて、大正期の飲食業態の分類について整理しておきたい。当時の飲食業態の分類は、現在私たちが抱くイメージと異なっている。大正当時の認識では、「料理店」という言葉と「飲食店」という言葉の意味は異なっている。権田のいう「料理店」とは、芸妓を呼ぶことを前提にした、現在でいう料亭のような座敷スタイルの日本料理店を指している。したがって料理店の女中という職業は、客と芸妓の間を取り持つ立場にある者で、単純な料理の運搬係ではない。権田は旧来型の飲食業態で働く女性たちを「料理店の女中」と称していたのである。大正期は、座敷に上がる構造の日本料理店以外を全部まとめて「飲食店」と称しており、カフェーも蕎麦屋も西洋料理店も中華料理店も汁粉屋も「飲食店」に含まれていたのである。

権田は当時の業態分類に従って、「カフェーのウェトレス」と「蕎麦屋汁粉屋の女中」を同じ項目で書きながらも、両者を別種のものと考えていた。権田は同書のなかで、「すしや、そばや等の堅気の商売に於いては、直接田舎から来て嫁入り前のものが多いが、カフェーの様などころでは所謂盛りの女が多い。そして前身といふ様なものも雑多である。（権田1923：55）」と述べている。この発言は、権田がカフェーの給仕を「堅気ではない」仕事とみていたことを示している。権田は続けて、蕎麦屋など「堅気」の飲食店で女中をしていた者が、やがてカフェーの給仕係になることがあるとし、その現象について次のように述べている。

浅草邊の飲食店について尋ねて見るに、初めて客商賣をするといふのは少ないとのこと。初め田舎から出た者は、堅気の奉公に入るが、都會の風が染み込むに伴れて、華やかな生活がして見度く、京橋、神田邊りの一寸した旅館とか料理店とかカフェーで可成りの理想をいただいて、其の生活の振出をするが、借金が借金を生んで、漸次に市の中心地を遠ざかり行き、その中のあるものは遂には千束町の様などん底にまで沈むものもあるとか。（権田1923：55-56）

権田は、「水商賣・客商賣」で働く女性たちが、接客業のなかで職を転々とする傾向を、浅草を中心に読み取りついていた。はじめは蕎麦屋などの「堅気な店」で働いていても、やがて慣れてくるともっと都会風の

生活がしたくなる。だが、もし安易にカフェで働こうものなら、あれよあれよという間に私娼になるのがオチだ、というのが権田の評価である。確かにそのような道をたどる女性がいたのかもしれないが、権田の評価は、ステレオタイプなイメージをそのまま一般論に展開しているという点で問題があるだろう。

しかし、下層階級の生活に関心を持っていた権田をもってしても、接客を担う女性たちへ寄り添う視点が感じられないということは、むしろ注目すべき点なのではないだろうか。カフェの常連である松崎天民は、具体的な女性給仕の顔を思い浮かべながら彼女たちのことを記していたが、大正中期はまだカフェの常連はインテリ層の一部という限られた人々であった。世間一般から見ると、松崎のような同情的なまなざしが少数派なのであって、権田の「カフェのウェイトレス」に対するイメージが当時の世間のまなざしを代弁していたのではないだろうか。

### 3. 関東大震災後のカフェ急増による「女給」という職業への注目

1923（大正12）年9月1日、関東大震災がおき、東京市は壊滅的な被害を受けた。震災を境に、カフェで働く女性給仕たちへの視線も変化した。関東大震災後の街の復興にともない、カフェの乱立は東京のあらゆる街で起こった。一流店から場末の店まで、カフェと一言ではくることができないほどカフェ業態は膨張し、あらゆる階層の男性がカフェに通うようになっていった。それと同時に、女給たちの待遇にも店舗間の格差が大きくなり、労働環境は過酷になっていったのである。銀座では、1924（大正13）年に開業したカフェ・タイガーが「美人女給」を戦略的に集めたことのインパクトが大きかった<sup>8)</sup>。神田などの学生街にもカフェが乱立したことで、学生たちがカフェに入りびたるようになっていった。

やがて全国的にもカフェが乱立するようになり、女性給仕の数が増大したことで、「女給」という言葉が定着するとともに、他の職業婦人とは別の職業として注目を集めるようになった。女給という職業への注目の高さは、雑誌の特集記事からもうかがえる。震災の2年後、1925（大正14）年頃から女給がどのような仕事なのかという視点での雑誌記事が散見されるようになるのである。

『婦女界』1925（大正14）年3月号ではF記者による「カフェ女給となつた二日間」という潜入ルポが掲載されている。F記者は最初に銀座のカフェ二軒で面接を受けたものの採用にならず、続いて両国で面接したがこちらも採用にならず、4軒目の神楽坂のカフェで採用となった。記事には2日間の体験が報告されているが、エプロン姿を鏡で見たときの心境を「こんな姿を親に見せたら、それこそおい、泣き出すであろう、と思ふと何だか情ないような気がして来て、つひ目頭の熱くなるのを覚えたけれど、ちつと我慢してわざと笑顔に紛らした<sup>9)</sup>」と記している。この潜入ルポはF記者が社内の記事のコンテストに参加するために自らの発案で挑んだものであったが、それでもエプロンを付けることが屈辱的な体験だったようだ。カフェの女給の地位の低さを読み取ることができる記述である。

『中央公論』1925（大正14）年7月号には「学生のカフェ入りとカフェ女給の研究」という特集が掲載され、宇野浩二、小川未明、谷崎精二、長田秀雄、豊島與志雄が論考を寄せている。執筆者5名はそれぞれに、学生がカフェに通うことに関する是非について述べている。

また、『アサヒグラフ』の1925（大正14）年12月23日号「カフェ女給さんの二十四時間」では、女給の一日密着レポートが掲載されている。1925（大正14）年に掲載されたこれらの3つの雑誌記事に共通しているのが、「カフェ女給」という言葉の使い方である。「女給」というだけではまだカフェに限定されないものの、カフェの女性給仕たちを指して「女給」と呼ぶことが浸透していたことがわかる。

行政による女給の実態に関する本格的な調査が実施されたのも、1925（大正14）年の夏のことであった。この調査の結果は、1926（大正15）年に中央職業紹介事務局『職業婦人調査 女給』としてまとめられている。

また、この時期に女給として働いていた女性たちの実体験をもとにした作品が発表されるようになっていく。細井和喜蔵の短編小説『女給』、林芙美子『放浪記』、窪川いね子（佐多稲子）による短編小説『レストラン・洛陽』である。これらの作品の共通点は、女給たちを厳しい環境で働く労働者として描いている点である。関東大震災前までは対象としてしか記されてこなかった女給が、当事者あるいは主人公の立場として描かれるようになったのである。女

給は客体ではなく、まなごしの主体として客や社会をみつめる存在として描かるようになっていったという点は、大きな転換であったと言えるだろう。

しかし、カフェーの氾濫、女給の増加により、若い学生たちのなかには学業を忘れてカフェーに没頭する者たちが現れはじめ、社会問題化するようになっていった。この現象を看過できないと考えた警察当局は取り締まりを強化していったのである。

#### 4. 昭和初期における女給表象の氾濫：大衆娯楽の対象になる女給

全国的なカフェーの乱立が目立つようになってくると、1930年頃から大衆娯楽における女給表象にも影響を与えるようになっていった。特に、大阪資本の大型カフェーの進出で銀座通りがネオン街に変貌した1930(昭和5)年は、女給を題材にした小説や映画、エッセーが氾濫した年でもあった。この二つの現象はパラレルな社会現象であり、互いに刺激し合うことによって女給の記号化を促進した。好奇心を刺激するメディアでの表象と、キラキラと変化をとげる銀座の夜の風景、そしてそれらの現象を追いかける新聞や雑誌の記事という循環がおこったのであった。性的魅力にあふれているということを表す言葉として「エロ」や「イット」という言葉が流行し、女給を形容する表現として頻繁に使用された時期でもあった。多くのメディアが女給の表象を繰り返すことにより、世間一般に女給のイメージが浸透し、普段女給たちと接点を持つことのない人々にとっても、女給は無視できない存在となっていた。この時期の女給に関するステレオタイプが、現在のカフェーや女給に関する学術研究にも大きな影響をあたえている。

昭和初期の女給表象のなかで、最も影響力の大きかったのは小説の題材として女給が頻繁に扱われたことである。とりわけ廣津和郎が婦人公論に連載した『女給』は、女給表象という点において最も影響力の大きかった小説だろう。この小説は後に映画化されている。また、銀座のカフェーに勤める女給を主人公にした永井荷風の『つゆのあとさき』も『中央公論』1931(昭和6)年10月号より連載を開始している。

女給表象は、連載小説のみならず映画(活動写真)のテーマとしても定番化していった。1930年頃には廣津の『女給』以外にも、女給を題材とした映画が多数公開されている。映画年鑑などから確認できた女給やカフェーをテーマにした日本映画を列挙すると、1927年公開の「カフェーの女王」(監督:大久保忠素)、1930年公開「カフェーの女」(原作:川口松太郎)、1930年公開「カフェーの夫婦」、1930年公開「女給」(監督:木藤茂)、1931年公開「女給」(監督:曾根純三、原作:廣津和郎)、1931年公開「女給哀史」(監督:五所平之助)、1932年公開「女給君代の巻」(監督:曾根純三、原作:廣津和郎)などがある。1931(昭和6)月1月24日の『讀賣新聞』に掲載された「女給哀史」の映画評論の冒頭は「この所日本映画界は女給物ばやりである。帝キネの『女給』もその流行の潮に乗つて、興行成績は大分いいらしい<sup>(10)</sup>」という言葉からはじまっている。このことから、大衆娯楽の題材として女給表象が溢れていたことがわかる。現在、戦前の映画は多くが現存していないため内容を確認することができない<sup>(11)</sup>。しかし、映画という大衆娯楽のテーマとして女給が競うように扱われていたことこそが、社会現象としての女給ブームを物語っている。

女給が大衆娯楽の表象として消費されるようになっていく傾向は、自らの女給経験を題材にした女性執筆者による小説でも同じであった。

1930(昭和5)年5月に刊行された田中雪子の『ユーモア事実小説 赤い灯青い灯 カフェー行進曲』(日吉堂)という本がある。『讀賣新聞』掲載の広告には、「女學校出の女給の自叙傳で事實は小説よりも面白く花柳界を壓倒したカフェー内部の真相が有りの儘に窺はれ尖端を行く女の思想と生活とが如實に知る彼女の本業はサービスか人肉販賣か?<sup>(12)</sup>」という宣伝文句が記されている。同書は女學校出の女給「花子」が東京のカフェーを転々とし、そこでの出来事や客との会話が書かれている書物である。本文の書き出しは「カフェーからカフェーへ、わたつて歩いた<sup>ウエイトレス</sup>女給の自叙傳よ。(田中1930:1)」からはじまる。店をコロコロ変えることを客に指摘されると、花子は「ウエイトレスは、カフェーの雇人ぢやありませんわ。言ふまでもありませんが、ウエイトレスは、カフェー店内のテーブルを借りて、そこを自分の作業場として、チップを稼ぐものですからね。それで、今日は東のカフェーにゐるかと思ふと、明日はまた西のバーに移つてゐたといふ風に、「女給さん入用」の札の掲げられてある自分の好きなどころへ、



身を寄せられるといふわけなんですわ。(田中 1930: 30)」と答えている。女給がおかれている不安定な立場を逆手にとると、自由気ままに移動できるという気軽さがあったようだ。だが花子がこの言葉を話しているのはまだ銀座のカフェーにいた頃のことである。花子のカフェーの移り方を見る限り、銀座の一流店から次第に場末の名もなき店へと移っている。

木谷絹子『女給日記』は女学校出の女給、木谷絹子の日記をもとにした手記である。同書は1930(昭和5)年11月25日発行版があるが、11月21日付で発禁となっている。その後、12月に改訂版が刊行された。改訂版の広告には、「問題の手記出づ これこそ昭和のデカメロン! 現代男性の淫慾なる横顔である。彼女は目下讀書界の人氣を一身に鍾め褒貶の嵐の中に立つ。或る男は妖婦と罵り又淑女として愛戀す。然も彼女はただ美しく頬笑む。私、之でも處女だわよ。<sup>(13)</sup>」と記されている。広告の宣伝文句の最後が「私、これでも處女だわよ」という言葉で終わっていることに注目したい。処女であるか否かということが、読者を引寄せる言葉として使用され、木谷の経験が娯楽の対象として消費されていくを感じざるを得ない。同書は主人公が女給として働き始めたばかりの19歳の頃から21歳で雇われ女主人として神田にカフェーを開業するまでの出来事が断片的に綴られている。同書のなかで木谷絹子は作家志望であると書かれているが、木谷に関する詳細は不明である。

1930年以降、女給に関する史料は豊富に存在している。現在研究者が入手できる女給関連史料の多くがこの時期に集中していることで、学術研究においても1930年頃の女給イメージ、すなわち「エロ」の対象としての女給が定着している。しかし、今後の研究で改めて問いたいのは、明治後期に近代的な職業として登場した女性給仕が、「エロ」の象徴として記号化されていくプロセスそのものなのである。

## 注

- (1) 3店のうち、カフェー・プランタンとカフェー・ライオンでは、女性が給仕をしていたが、カフェー・パウリスタで給仕をしていたのは男性であった。
- (2) 松井栄一・曾根博義・大屋幸世監修『近代用語の辞典集成2』大空社、1994年(服部嘉香・植原路郎『訂正増補新しい言葉の字引』実業之日本社、1919年、161頁)。
- (3) ただし、カフェーの給仕のことを「女給」と呼ばなかったわけではなかったようで、同書のウェイトレスの欄には、「女給仕人。(「女給」「女ボーイ」参照)」とある。出典：松井栄一・曾根博義・大屋幸世監修『近代用語の辞典集成2』大空社、1994年(服部嘉香・植原路郎『訂正増補 新しい言葉の字引』実業之日本社、1919年、38頁)。
- (4) 松井栄一・曾根博義・大屋幸世監修『近代用語の辞典集成3』大空社、1994年(服部嘉香・植原路郎『大増補改版 新しい言葉の字引』実業之日本社、1925年、338頁)。
- (5) 『讀賣新聞』1913(大正2)年11月30日朝刊、3頁。
- (6) 變装記者「カフェーライオンの給仕となる記」『新公論』1913(大正2)年11月号。この記事が知久棧雲峽雨生『変装探訪世態の様々』一誠堂書店、1914(大正3)年に所収されていることから、この變装記者は知久であることがわかる。ただし同書の奥付の著者名は知久政太郎となっている。
- (7) 『東京朝日新聞』1911年8月27日朝刊、6頁。
- (8) 菊池寛をはじめ、著名な文士たちがこぞって通ったことでも知られている。同店は廣津和郎が1930(昭和5)年に連載を開始した小説『女給』のモデルにもなっている。
- (9) 『婦女界』1925年3月号、131頁。
- (10) 『讀賣新聞』1931年、1月24日朝刊、10頁。
- (11) 筆者が動画で確認することができた女給表象で最も古いものは、1929年公開『大學は出たけれど』(監督：小津安二郎)である。
- (12) 『讀賣新聞』1930年5月7日、広告。
- (13) 『讀賣新聞』1930年12月3日、広告。

## 参考文献

- 権田保之助 1923『社会研究 娯楽業者の群』実業之日本社  
 木谷絹子 1930『女給日記』金星堂  
 町田祐一 2016『近代都市の下層社会 東京の職業紹介所をめぐる人々』法政大学出版局  
 松崎天民 1915『恋と名と金と』弘學館  
 松崎天民 1920『女人崇拜』精禾堂  
 田中雪子 1930『カフェー行進曲』日吉堂本店  
 東京市社会局編纂 1925『婦人自立の道』